

第 3 回インドネシア大学サイエンス・フェスティバルで講演しました (2017/9/18-19)

テーマ：公衆衛生学と持続可能な開発目標(SDG)

会場：インドネシア大学公衆衛生学部キャンパス（ジャカルタ）

2017年9月18-19日（月一火）にジャカルタで開催された第3回インドネシア大学サイエンス・フェスティバルで江川新一教授が招待講演を行いました。

インドネシア大学はインドネシアで最大の国立大学で、公衆衛生学部には、公衆衛生学、地域保健学、病院管理学、環境保健学、栄養学、病院管理学、産業医学など多数の学科からなり、学部生、大学院生などを合わせると3000人以上の学生が在籍する大きな学部です。今年は第3回公衆衛生国際会議と、第1回若手研究者による公衆衛生シンポジウムを合体させたサイエンス・フェスティバルとして開催されました。インドネシア政府から、持続可能な開発目標(SDG)のGoal 3(健康)のなかで、あまねく人々に健康へのアクセスを提供する Universal Health Coverageの概念に沿う形で、国民を健康保険でカバーする制度が2014年から始まり、2019年に完遂をめざしていることが報告されました。オーストラリア、香港、台湾、日本などから演者が招待され、SDG、公衆衛生プロモーション、新興・再興感染症、非感染症、環境保健、母子保健、災害と健康危機、メンタルヘルス、都市・地域保健、保健医療の不平等などについて多くのシンポジウムが開催されました。江川新一教授は災害医療について、仙台防災枠組に基づいて災害リスクを減らす考え方や、災害における保健医療ニーズの変化、シミュレーションを用いた災害医療の効率化などについて講演し、多くの質問がありました。

フェスティバルでは大学院生が発表するミニシンポジウム、研究・論文作成に関するワークショップも数多く開催されました。学部生も多く、歌やダンス、バンド演奏などもキャンパスで開催され、多くの大学院生が実行委員として活躍していました。

変化しつつある世界のなかで、人々の健康はヘルスクラスターだけでカバーされるものではなく、すべてのクラスターが協力・協調しながら守るべき中心となる基本的な人権です。仙台防災枠組、SDG、気候変動枠組みが互いに関連し、連動して人々の健康を推進することの重要性が協調されました。そのためにも、保健医療クラスターは他のクラスターへの働きかけを推進し、また他のクラスターの行為が人々の健康にどのように貢献するか（場合によっては被害をあたえるか）を伝える必要があります。

大変印象的だったのは、HIV 感染は、人々の健康危機に対する受け止め方とメンタルヘルスの状態が大きく異なるため、利用しやすく有効な治療法の開発とともに行動科学とメンタルヘルス面からのアプローチが欠かせないという講演でした。また、障がい者は仙台防災枠組でもステークホルダー（意思決定者）となっていますが、自身が障がい者でもある演者が Take Home Messageとして挙げたのは、障がい者のことを『彼ら』として他人事のように扱うのではなく、誰しもが障害者になりうる、あるいは障がい者の家族・知人となりうる『私たち』の問題として考えるべきだという言葉でした。災害の際に『誰も置いてきぼりを作らない(Leave No One Behind)』ためには、障がい者・女性・子供・年配者・有病者・少数者なども含めてすべての人が『私たち』の防災を実践しなくてはならないことを再確認させられました。

さまざまな分野の研究者と意識の高い学生が集まる場としてインドネシア大学公衆衛生サイエンス・フェスティバルはこれからも発展を続けそうです。



シンポジウムで講演した江川新一教授



会場と質問者の様子



さまざまなパフォーミングアーツが繰り広げられる公衆衛生学キャンパス



全参加者と



障がい者のメンタルヘルスを『私たち』の問題としてとらえることを強く学びました

文責：江川新一（災害医学研究部門）